

巻頭言

世界を包摂する本

野谷 文昭

引越しのたびに行方不明になり、もはや失われたものとして思い出用のリストに入れ掛けたころ、ひょっこり姿を現す本がある。本と言っても文学書や研究書ではない。昔、野ぼら社から出た『世界の民謡』という、青い表紙の小さな歌集で、刊行年は奥付によると1963年（でも記憶では1962年だった気がする）。日本を国際化したと言われる東京オリンピックの前年だから、やはり「世界」を意識しての出版だったのかもしれない。この本には文字通り世界の民謡が載っていて、楽譜と歌詞がついている。手に入れたのは中学生のときで、授業で英語を習い、他の外国語にも興味を抱きだしたころである。何よりもありがたかったのは、片仮名でルビが振ってあることだった。その気になれば、ルビを頼りに何語の歌でも声に出して歌えるのだ。

ロシア民謡で好きだったのは「赤いサラファン」や「ステンカ・ラージン」で、僕は同僚の沼野充義よりも先に片仮名でロシア語の歌を歌ったはずだ。アメリカ民謡では「谷間の別れ」つまり *Red River Valley* が気に入って、夏の林間学校でキャンプファイアーを焚いたときにアカペラで歌ったほどである。もちろん英語で歌ったのだが、このパフォーマンスは同じく同僚の柴田元幸の先を行っていたのではないだろうか。このころの彼はまだ小学校に入りたてだっただろう。

雲居佐和子という上品で博識な音楽の先生に声を掛けられ、憧れの上級生がメンバーだったこともあって入ったサークルで *When the Moon Comes Over the Mountain* を日本語で合唱したとき、どうしても原語で歌いたくなり、それが載っている本を探し回った挙句、『世界の民謡』に出会ったのだった。残念ながら目指す曲はなかったが、*Red River Valley* は載っていた。

半世紀も前の本なのに、ほとんど焼けてないのを不思議に思いながら久々に開いてみる。目次にはスペイン・中・南米の部があり、そこには「ラ・パロマ」も入っている。この曲を僕が口ずさむのは中学生時代に始まるということに、今になって気づいた。いい加減なギターで弾き語りをするようになるのはずっとあとのことで、当時はもっぱらアカペラだった。ギターは日活映画が原因だろうか、不良のイメージと結びつくらしく、母が好まな

かったのだ。と言っても、このエピソードが直ちに僕とラテン的なものを結びつけたわけではない。ナット・キング・コールの歌う英語なまりの「キサス、キサス」やアイ・ジョージの「ククルクク・パロマ」などがラジオやテレビから聞こえ、それらが下地を作っていたのだろう。1950年代後半から1960年代前半にかけて、音楽は百花繚乱、今と違ってカンツォーネ、シャンソン、ジャズ、ポップス、ロック、フォークなどがすべて対等に自己主張していた。

『世界の民謡』は、ハンディータイプでありながら、なんと169曲も収録している。本の表記にしたがって国名・地域名を挙げれば、イギリス、イタリア、フランス、スペイン・中・南米、アメリカ、ドイツ、ヨーロッパ諸国（スイス、北欧、東欧）、ロシア、アジア（中国、朝鮮、ジャワ）という具合で、国や地域にはさらに地方が含まれていたりする。あの分厚いカラオケの曲目リストもこれほどの多様性をカバーしてはいない。この本に含まれている曲は言語を越えてすべて愛おしい気がしたものだ。ことによると、それは一種の多形倒錯だったのかもしれない。

あらためて思ったのは、僕にとってはバイブルにも等しい本が実は現代文芸論のアナロジーになっていたということだ。世界の歌曲の中のスペイン語歌曲。長らくスペイン語およびラテンアメリカ文学を自分のフィールドとして研究や翻訳・紹介を続ける中で、あまり親密な関係になりすぎると、世界に背を向けている気がするときがある。そんなとき、ほかの言語の文学に触れると、相対化という現象が起きることによって、ラテンアメリカ文学の特徴がむしろくっきりするし、ほかの言語の文学との関係性も見えてくる。これは文学作品にとって望ましいことではないだろうか。文学作品を箱入り娘にしてはいけないのだ。かわいい子には旅をさせる必要がある。それには読者自身も旅をしなければならぬことは言うまでもないが、物理的な旅ができなければ書物を通じてでもいい。現代文芸論はそんな旅を可能にしてくれる場である。ラテンアメリカ文学をギターのように引っさげて旅をする。その成果はきっとある。